Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-04

宝塚市西谷地区における都市近郊農業の振興

内藤, 周
矢嶋, 巌

(Citation)
兵庫地理,68:129-139

(Issue Date)
2023

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482461

兵庫地理 68(2023)127-139

宝塚市西谷地区における都市近郊農業の振興

内藤　周・矢嶋　巌

第１章　はじめに

兵庫県の阪神地域に位置する住宅衛星都市である宝塚市では、大阪平野に面する南部で農地の宅地転用が進んだ一方、大部分が山間部である北部の西谷地区では農業が縮小しつつ続いており、宝塚市の農地や農業従事者数の大半を占めている。

西谷地区は市街地化調整区域である。宝塚市の農業の持続的な発展を目的として 2022 年に策定された第 2 次宝塚市農業振興計画では、西谷地区では都市近郊農業が営まれていることが前提になっているとみられる。宝塚市統計書に掲載される農林業センサ結果によると、2020 年の時点で西谷地区の経営耕地面積は、宝塚市全体の約 4 分の 3 を占め、米を主体としつつ様々な農産物が生産されており、中には地域においてブランド化されている野菜や畜産物も存在する。だが、宝塚市では市民の農業への理解が不足していることも指摘されている。

中窪（2019）によると、近畿では市場と消費者の近さを活かした高収益な都市農業・近郊農業が営まれていることが特徴であり、西谷地区は後者に当てはまる。

田林（2006）によると、日本の農業は優良な農業従事者の減少、高齢化が問題視されており、農業や農村を誰が担っていくのかが課題とされている。西谷地区においても農業振興に向けた様々な取り組みが行われているものの、農業従事者数は減少し、高齢化が進み、それに伴って様々な問題が発生している（宝塚市農政課編 2022）。

そこで、本研究では、住宅衛星都市である宝塚市において、継続的に農業が営まれる北部西谷地区を中心に、農業の特性と現状、農家の実態と戦略を明らかにしたうえで、今後も同地域において農業が継続するための方法について検討することを目的とする。

第２章　都市近郊農業地域における地産地消の意味

2021 年に策定された第 6 次宝塚市総合計画では、食料の安定供給や農地が有する多面的機能などの農業が行われることによって果たす役割について言及しており、そのための施策の一環として、地産地消の取り組みの支援を行うとしている。

以下では、大阪平野に位置する二つの都市での地産地消に対する都市住民の関心が分かる事例を取り上げることによって、都市近郊農業地域における地産地消の持つ意味について考える。

廉林・松村（2010）によると、住宅衛星都市で都市近郊農業も盛んな茨木市では、都市住民の多くが地域の農業の現状や地場産野菜の取り扱い店舗についての知識は不足しているものの、地場産野菜に肯定的かつ関心を持っているという結果が示された

石原（2019）が都市農業の例として紹介した八尾市の場合、市民が農業に理解を示すことでイベントを開催し、農業振興につなげた。具体的には、市民活動団体が地元食材の利用を条件としたバルイベントである「八尾バル」を実施していた[1)]。石原は、農業者にとっても「八尾バル」への協力は地産地消を進めるうえで意義があるものだと推測していた。また、八尾市の補助金を受けていたことも指摘しており、自治体がその活動に意義があるものとして判断していたものと考えられる。また、市民が主体となった取り組みであるために、参加飲食店に特定の八尾産農産物（葉ゴボウ、エダマメ）を使用する規約を設けることができたという。八尾バルは、市民が主体となって自治体、農家を巻き込み都市農業振興の取り組みが行われた例としても注目に値する。

第３章　宝塚市の農業

１．宝塚市西谷地区の概要

兵庫県の阪神地域に位置する住宅衛星都市である宝塚市は、第1図のとおり住宅地が広がる南部と大部分が山間部である北部に分けられる。

第1図　宝塚市の概観

資料：20万分の1地勢図「京都及び大阪」（2003年修正）を基に作成した矢嶋（2011）掲載の図を一部改変

宝塚市域は、市制が施行される以前の自治体に基づいて、北部の西谷地区、南部の宝塚地区、良元地区、長尾地区に分けられる。

2020年の国勢調査によると、人口は226,432人であり、その多くが住宅地の広がる南部に居住している。また、宝塚市は京阪神大都市圏の住宅衛星都市である一方、全国的に知られている宝塚歌劇場や阪神競馬場が立地する観光都市としての一面も有しており、コロナ禍前の2019年には年間約1千万人の観光客が訪れている（宝塚市統計書による）。

このように、現在の宝塚市は住宅衛星都市や観光都市としての側面が強いが、2012年に発行された『宝塚市農業振興計画』によると、市制が施行された1959年には人口約4万人のうち約1万人が農家人口であり、かつては農業が主要な産業であった。しかし、宅地開発がすすめられた現在では、南部の長尾地区において伝統的に行われている植木産業と北部の西谷地区以外の農業はほぼ衰退している。しかし、農業が営まれている2つの地区でさえ、全国的な傾向と同じく後継者不足や遊休農地の増加などの問題が発生している。

第2図　宝塚市農政課パンフレット「西谷野菜がご近所に」に示される西谷産野菜

2022年に宝塚市農政課によって策定された第2次宝塚市農業振興計画によると、農業が最も盛んである北部の西谷地区では、米をはじめとして軟弱野菜や花き類が栽培されており、代表的な農作物とし

第2表　販売農家数と経営耕地の推移

年	販売農家数	0.3ha未満	0.3～0.5	0.5～1.0	1.0～1.5	1.5～2.0	2.0～3.0	3.0～5.0	5.0ha以上
2005	294	1	84	140	48	11	3	6	1
2010	276	1	74	129	48	13	4	6	－
2015	252	1	58	126	43	13	5	3	－

資料：宝塚市統計書に掲載される農林業センサスより筆者作成

て、「たからづか西谷太ねぎ」としてブランド化している太ねぎや宝塚市とその周辺地域でのみ生産されている北摂栗（第２図）、全国でも有数の産地であるダリアなどが栽培されている。また、西谷産農畜産物の一部は、阪急宝塚駅前の商業施設ソリオに位置する全国展開の和菓子チェーン店で食材として使用されているほか、地元牛乳会社の直営店舗で販売されており、地元住民や観光客が利用している。

2019 年に発行された『たからづか北部地域土地利用計画』によれば、西谷地区は全域が市街化調整区域で、2009 年の調査では山林が 77%、農地が 8%を占めている。市街地は 2.3%と狭く、都市化の影響をあまり受けずに自然環境と農地が維持されてきた地域であるといえる。第３図は西谷地区中心部大原野に位置する西谷夢市場付近の農地の様子である。

２．宝塚市における農業の変遷

宝塚市統計書に掲載される農林業センサス結果を基に宝塚市の農業の変遷や特徴についてみていく。

宝塚市では、1980 年には 1,263 戸であった農家数が、2020 年には 537 戸まで減少した。

第３図　農地が広がる西谷地区中心部大原野の様子

2022 年 4 月 25 日筆者撮影

2000 年～2020 年における宝塚市の農家数の推移を示した第１表によれば、全農家数が減少する中で自給的農家数は横ばいで推移して割合を高めている。販売農家は約７割に減る中で、大きく減少したのは販売農家の約 3 分の 2 を占めている第二種兼業農家である。

第１表　宝塚市の農家数の変化（戸）

年	農家数					
	総数	自給的農家	販売農家			
			総数	専業農家	兼業農家	
					第一種	第二種
2000	751	217	534	77	67	390
2005	702	250	452	71	48	333
2010	676	258	418	70	52	296
2015	598	228	370	76	55	239
2020	537	224	313	-	-	-

資料：宝塚市統計書に掲載される農林業センサスより筆者作成

次に西谷地区の販売農家の経営規模や農産物の特徴について述べる。

第 2 表のとおり、宝塚市は 0.3～1.0ha の経営耕地を有する小規模農家が多い地域であるといえる。2005 年から 2015 年にかけては 0.3～1.0ha の農家数が減少しており、小規模な第二種兼業農家が減少したと推測される。そして、経営耕地の内訳については、第３表のとおり水田が 79%と大部分を占めている。JA の担当者からの聞き取りによると、兼業農家が多いため、機械化が進み収穫や作付けなどが容易である米が選択されやすいという。

第３表　2020 年の地区別の経営耕地と内訳（ha）

区分	総数	良元地区	宝塚地区	長尾地区	西谷地区
総面積	281	3	22	43	213
田	222	2	17	27	176
畑	36	1	3	9	23
樹園地	23	−	2	8	13

資料：宝塚市統計書に掲載される農林業センサスより筆者作成

その一方で、阪神地域の市町における農業生産額を示した第４図によると、宝塚市の農業生産額は野菜類の売り上げが米よりも多い。この理由として、経営耕地が最も広い米が年に１回の生産であるため、裏作として別の農作物を生産する二毛作が実施されていること、宝塚市の農業の中心である西谷地区において、様々な野菜を生産する多品目生産が行われていることが考えられる。実際に、筆者が行った調査の中では、

少なくとも6品目以上の野菜を生産している農家が10人中7人であり、多数を占めていた。

宝塚市の農業産出額は阪神地域の市町の中で2番目に多く、猪名川町、西宮市、伊丹市、尼崎市と同様に米よりも野菜の産出額が多い。都市化が進行している西宮市、伊丹市、尼崎市と比べると比重は小さいものの、野菜の生産は一定の地位を占めているといえる。

３．宝塚市民の西谷地区の農業についての認識

宝塚市では、農業振興に向けた様々な取り組みが講じられている。市が主体となっている近年の取り組みとしては、給食や農業振興施設である西谷夢市場の設置等が挙げられる。

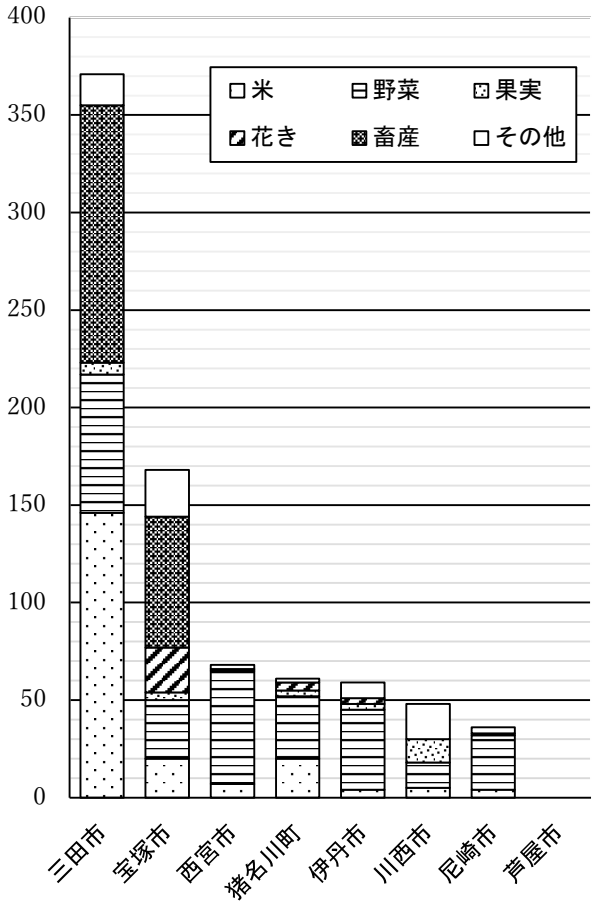
西谷産の農産物は市立の小中学校の給食で2001年から段階的に導入されており、JA兵庫六甲西谷支店の担当者によれば、同支店の16名の若手農家を中心に給食の部会が設立され、宝塚市との話し合いの中で作成した計画に則って、冬季と夏季の年4回に集中して取り入れられている。

また、生産者が主体となっている取り組みも行われており、その代表例が朝市である。宝塚市では、市と生産者が主体となって、市域南部に位置する市役所横の武庫川河川敷において月に1回を目安に朝市が開催されている。また、市街地中心部に位置する市立芸術文化センターにおいても同じく月に1回を目安として、対面販売の朝市が行われている。

このようにいくつかの農業振興に向けての取り組みが講じられているが、第2次宝塚市農業振興計画によると、いずれのイベントや施設も顧客が固定化したことによる来場者の伸び悩み等の問題が指摘されており、新しい在り方を模索すべきであるとされている。

また、第2次宝塚市農業振興計画では、市内のスーパーマーケットと西谷夢市場で農産物を購入した消費者を対象に対面によるアンケートを実施し、課題を明らかにした。

宝塚市の農業に関係することで知っていることについてのアンケート結果を示した第4表を見ると、西谷夢市場でのアンケート結果では、消費者の西谷関連のものに対する認知度は、半分以下であった。一方、南部にのみ存在するスーパーマーケットでのアンケート結果では、南部に2店舗を展開するたからづか牛乳（店舗公式ホームページ）を除くと、認知度はさらに低かった。特に市内に唯一存在する農産物直売所である西谷夢市場の認知度は29.4%に留まり、学校給食での使用については9.2%と低く、南部に住む市民の西谷地区の農業についての認知度が低いことが読み取れる。



第4図　阪神地域の市町における農業総生産額

（千万円）

資料：2020年度農林業センサスより筆者作成

注　：芦屋市の販売農家は1軒であるため示されない。

市民の宝塚市の農業への理解が不足していることについては、第2次宝塚市農業振興計画でも指摘されており、宝塚市において農業を継続させていくためにも、農業に対する市民の理解と意識を高める必要があ

るとしている。

2022年2月に市の担当者に行った聞き取りによれば、宝塚市農政課によって代表的な西谷産農産物5種類と、西谷産農産物が販売されている市内のコープや百貨店、スーパーマーケット、西谷夢市場を紹介するパンフレットが作成された（第2図）。市民への周知を図ろうとしているとみられる。

４．西谷地区の農業振興に向けた取り組み

(1) 西谷夢市場について

第 2 次宝塚市農業振興計画によると、「市立農業振興施設（西谷夢市場）」は農業の振興と地域の活性化を図るために 2005年に開設され、たからづか西谷太ねぎ、黒大豆枝豆をはじめとする宝塚の旬の特産野菜や新鮮な農産物、加工品を取り扱う施設であり、市がJA兵庫六甲西谷支店と共に運営している（第5図）。

この施設では、一般的な直売所と同様に生産者が直接出荷を行い、商品には生産者の名前が記載される。

筆者が 2022 年 7 月に同施設内で生産者に対して行った聞き取り調査では、西谷夢市場のみで販売を行っている農家もみられた。また、生産物に名前が記入されているので消費者や知り合いから直接感想を伝えられる機会の創出につながっているという声や、他の生産者の野菜を見ることでより良いものを作ろうとする競争が促されているという声があった。

これらのことから、西谷夢市場は宝塚市民が西谷地区の農産物を購入することができる場であることに加えて、小規模な農家でも販売することができ、西谷

第４表　「宝塚市の農業に関係することで知っていること」についてのアンケート結果

	アンケートの調査項目	全体（ｎ＝179）	スーパーマーケット（n=119）	西谷夢市場（n=60）
西谷関連	西谷夢市場	48.0%	29.4%	85.0%
	宝塚朝市	22.3%	23.5%	50.0%
	宝塚ダリア園	36.9%	28.6%	55.3%
	西谷収穫祭	24.0%	20.2%	31.7%
	たからづか牛乳	40.8%	37.8%	46.7%
	たからづか西谷太ねぎ	17.3%	8.4%	35.0%
	北摂栗の産地	14.5%	10.1%	23.3%
	黒枝豆の産地	31.8%	25.2%	45.0%
	ダリア球根の産地	20.1%	10.1%	40.0%
植木関連	あいあいパーク	69.8%	76.5%	56.7%
	木接太夫（坂上頼泰）	18.4%	16.0%	23.3%
	宝塚植木まつり	46.4%	50.4%	38.3%
	宝塚オープンガーデンフェスタ	12.8%	8.4%	21.7%
	宝塚長谷牡丹園	32.4%	23.5%	50.0%
	花き・植木の産地である	22.3%	17.6%	31.7%
その他	小学・中学の学校給食で使用	12.3%	9.2%	18.3%
	特にない	8.4%	6.7%	11.7%
	無回答	3.4%	5.0%	0.0%

資料：第2次宝塚市農業振興計画より筆者作成

注　：2019年11月に宝塚市内のスーパーマーケット及び農産物直売所（西谷夢市場）で農産物を購入した消費者を対象として対面で実施されたアンケート調査に基づく（回収数179 件、複数回答）。なお、スーパーマーケットは南部地域に位置するとみられる。

第５図　西谷夢市場の外観

2022 年４月 25 日　内藤撮影

地区で農業を続けるモチベーションの維持に貢献している重要な場所であることが読み取れる。

課題として、第１図から分かるように西谷夢市場は、市域南部の市街地から離れた山間部に位置しているため、中心部から公共交通機関で１時間ほどかかることに加えて、武田尾駅からの交通手段であるバスも１時間に１本程度の頻度で運行していることもあって、南部の住民にとってアクセスが良いとは言い難い。

(2) 宝塚朝市について

宝塚朝市は生産者自らが対面販売を行うイベントであり、2022 年は毎月第４日曜日に市役所横の河川敷（第６図）において月１回を目安にガレージセールと共に開催されている（宝塚市ホームページ「イベント宝塚朝市」）。

第６図　西谷朝市の様子

資料：宝塚市公式ホームページ

筆者が 2022 年２月に宝塚市農政課の担当者に、2022 年９月に朝市に参加していた農家に対して行った調査によると、減反政策により転作が推進された影響で生産が増えた野菜の販売場所を増やす目的で 1992 年に西谷地区の 10 集落の農家の組合で話し合った結果、朝市の開催が提案されたことが始まったきっかけであるという。

この朝市が始まった当初は 20 名ほどの組合員が在籍していたが、2022 年９月の時点で 40 代から 70 代の組合員７名で運営している状況であり、新しい組合員は加わっていないとのことだった。新しい組合員が加わっていない理由は、朝市に出品するためには８から 10 品目ほどの農産物を生産できる経験豊かな農家である必要があるため、新しく組合員を入れることは難しいとのことであった。

朝市を運営する目的は、対面で消費者と交流しながら販売することによって西谷産野菜のファンを増やすことにある。実際に筆者が聞き取り調査を行っている最中でも、客に野菜の調理法を教えたり、顔見知りの顧客に旬の食材を勧めるなどして消費者と積極的に交流を図る姿を垣間見ることができた。ファンになった市民が、市内各地のスーパーや西谷夢市場で組合員の農家の名前が入った西谷産野菜を購買することもあるという。

生産者にとっては、朝市での活動を通じて消費者に直接感想を伝えられることやリピーターになって継続的に交流を続けることがやりがいにつながっているとのことであった。

また、朝市と共に開催されていたガレージセールでは、幅広い年齢層の客が訪れており、親子連れなどの若い世代も多く見られたため、朝市が開催されることによって結果的に宝塚市の都市部に住む若い世代への西谷産野菜のアピールにつながっていると考えられる。

市としても対面販売を通じて西谷地区の農家と市民が交流することのできる貴重な機会であることや、イベントを通じて西谷産野菜のファンを増やす機会でもあることから、開催を継続したいと考えている。

しかし、市の担当者は、組合員の数や年齢の問題から朝市の開催は今の規模と頻度が限界であるとみているようであり、今後の運営の維持について危惧して

いた。

(3) JA 兵庫六甲西谷支店の取り組み

筆者が 2022 年 4 月に JA 兵庫六甲西谷支店の営農担当者に対して行った調査によると、同支店の主な業務内容は、一般的な JA と同じく種や肥料などの生産資材の販売、栽培の指導や集荷した農作物の売り上げの還元など、農業を運営するうえでのサポートである。さらに、近年では農業の効率の向上を目的として、集落営農を活性化させるための組織づくりにも力を入れて取り組んでいるという。

このうち集落営農については、いくつかの農家から話し合いが滞っているという意見が出されたことからも難航しているとみられる。西谷地区には「一匹狼気質」の農家が多く、そのことも組織づくりを難しくしているとする農家の意見もあった。

地産地消の取り組みに関しては、上述の西谷夢市場での販売のほか、JA が窓口になることによって 2010 年より市内のコープや百貨店、スーパーマーケットで西谷産野菜の取り扱いが開始されたという。また、これらの取り組みによって南部の住民も日常的に西谷産野菜を入手することができるようになったが、それまでに朝市が果たした役割の重要性についても指摘していた。

西谷地区の農業の課題としては、農家の高齢化に伴ってイノシシやシカによる獣害への対策が困難になってきていることが挙げられていた。

(4) 宝塚市による新規就農者確保事業について

筆者が 2022 年 9 月に宝塚市農政課の担当者に対して行った聞き取り調査によると、宝塚市は新規就農者確保事業に特に力を入れている。西谷地区も全国的な傾向と同じく農業の現場における高齢化が進む中で、若手の就農者を増やし、使われていない農地を活用する目的で計画された。このほかにも、兼業農家が多く米の栽培が主であることから、野菜の生産を増やす目的もあるという。

この事業の具体的な内容は、農業大学校の卒業者などのある程度の経験を積んだ 20 代から 40 代までの農家を対象にパイプハウス一棟と隣接する土地を貸し出し、その間は地域の認定農業者による支援が受けられるというものであり、事業を利用している間は直売所である西谷夢市場に出品することが求められる。

この事業が実施されている場所は、大原野と波豆の二つの集落であり、西谷地区内の 10 の集落ごとに分かれた農家の組合による話し合いの結果、選ばれた。定員 2 名のうち、現在は 20 代の男性の農家 1 名が 2020 年度より利用している状況であり、かぼちゃやブロッコリーを生産している。しかし、市の担当者によれば、土地の広さが課題として挙げられ、農地を集約する必要性について指摘していた。

この事業では、地域の農家の組合による手助けが大きな役割を果たしているが、支援を受ける人物の選定においては、JA 兵庫六甲西谷支店や兵庫県阪神農業改良普及センターの職員も協力している。特に、農業用水の利用や集落単位で協力して農薬散布や草刈りなどの作業を行う関係上、地元の組織の理解と新規就農者が積極的に交流を図る姿勢が最も重要であるという。

また、課題としてマッチングの難しさがあり、月に 2 名程度の希望者が来るものの、現在の農業経験者という条件を緩めると教える手間が増えてしまうことから、断るケースが多いとのことだった。

5. 西谷地区の農家の例

以下では西谷地区の農家 10 名に行った聞き取り調査の結果について、兼業農家、専業農家、朝市に参加している農家ごとに述べる。

(1) 兼業農家の例

①70 代女性 A 氏

70 代の兼業農家である女性 A 氏は、米をはじめとして、ピーマンやなすびといった夏野菜、ほうれんそうや白菜などの軟弱野菜を主に栽培しており、西谷夢市場に出荷しているほか、JA を通して市内のスーパーマーケットにも出荷している。

A 氏は西谷地区に嫁いだことがきっかけで農家になった。嫁いだ当時は、西谷地区内に製材所や竹細工な

どの副業があったが、徐々に都市部で働く兼業農家に転身する人が増えたとのことであった。

また、今後農業を続けていくうえでの懸念として、年齢と共に体の不調が増え、早朝の作業が厳しくなったり、モチベーションの低下につながっていることが挙げられていた。しかし、年齢的な問題から農業が難しくなった現在においても、質のいい野菜ができて売り上げが上がることによる達成感や、生産物を購入した消費者の声がやりがいにつながっている。

②50 代男性 B 氏

50 代男性 B 氏は、きゅうりやなすび、ピーマンといった夏野菜に加えて、玉ねぎやズッキーニなどの野菜を主に栽培している兼業農家である。西谷夢市場のみに出荷している。

B 氏は同じく兼業農家であった両親から家業を引き継ぐ形で農家になり、現在も西谷地区内で小売業の自営として働きながら副業として農業も営んでいる。また、B 氏も A 氏と同様に自身の生産物が売れた達成感が農業を続ける上でのモチベーションの維持につながっていることに加えて、他の農家の生産物を見て良い意味での競争意識が生まれるという面からも西谷夢市場が重要であると考えていた。

今後農業を続けていくうえでの懸念として高齢化が挙げられ、年齢を重ねるにつれての栽培の難しさが指摘されていた。また、後継者は地域にある程度存在すると指摘したうえで、北摂栗やたからづか西谷太ねぎのようにブランド化され、ある程度計画的に栽培されている農産物があることによって、地域が潤うことを期待していた。

③70 代男性 C 氏

C 氏はキャベツ、きゅうり、ニンジンを栽培する兼業農家であり、出荷先は西谷夢市場のみである。また、かつてスイカの栽培に挑戦したものの、土壌の相性の問題からあきらめたこともあった。

C 氏は両親から農地を引き継いで兼業農家となった人物であり、現在管理している農地も子供に引き継がせる予定であるという。C 氏は年齢を重ねるにつれて農地の維持管理や生産物の運搬が厳しくなることが問題であると指摘しており、地域の高齢化に伴って顕著になってきていると述べていた。

(2) 専業農家の例

①50 代男性 D 氏

50 代男性 D 氏は西谷地区の北部の集落で、農業を営む専業農家であり、同集落をはじめとして、西谷地区や隣接する猪名川町に広く農地を所有している。

D 氏は、米を主体として生産しているため、ピーマン、里芋、丹波黒大豆、生姜などの比較的管理が容易な野菜を生産している。出荷先としては、JA 兵庫六甲を通じての出荷が全体の９割程度を占めており、伊丹市内の大手総合スーパーマーケット２店に出荷している。なお、丹波黒大豆などの旬の食材は、友人や口伝での繋がりでも販売しているとのことである。

また、冬は販売できる生産物がないため、環境保全と獣害対策を主な目的として、シイタケの原木を猪名川町の農家に販売する林業を行っている。

D 氏の両親は、生花の栽培を主体とした農家である。D 氏は、農業高校に進学して JA 兵庫六甲で勤務しで経験を積んだのちに、農地の一部を引き継ぐ形で就農した。D 氏は農業経営について、厳しい状況にある農業を続けていくには、「農業を行うことが好きじゃないと続かない」と考えている。D 氏によれば、集落内の同級生で農家を継いだのはおそらく D 氏一人であるという。同集落では、D 氏の世代が最も若い世代あり、高齢化の進行と後継者不足が特に進んでいる集落であるという。このような状況において、第 3 章 4 (3) で述べたとおり、近年同集落では集落営農のための組織である営農組合が発足し、共同で農作業に用いる機械の購入などを行っている。

また、D 氏は高齢化に伴って管理できなくなった土地を買い取ったり、管理を任されたりしているが、それらの農地は西谷地区内で点在していた。D 氏によれば、このようなケースが近年増加傾向にあるという。

②40 代男性 E 氏

40 代男性 E 氏は、ビニールハウスで年間を通じて生産するいちご（紅ほっぺ、やよい姫）を主軸として、米も生産している専業農家である。いちごを選択した理由としては、専業農家の中では面積が狭い E 氏の農

地で収益を上げるため、周囲に生産している農家が少ないことから競争が発生せず、なおかつ単価が高く面積当たりの収益が多く見込めることが挙げられていた。出荷先の3分の1が洋菓子店などの事業者への直売であり、残りはJA兵庫六甲を通しての出荷である。

現在E氏のいちごは、宝塚市だけではなく三田市や伊丹市の洋菓子店が顧客となっている。洋菓子店と取引する農家には直接店舗に配送することが取引の条件として求められることが多いものの、E氏は作業効率を重視して全て断っているという。

E氏は比較的最近専業農家になった。それまでは一般企業で渉外などを担当する総合職として日本各地を転勤しながら勤務していた。E氏は、第二種兼業農家であった親が他界したことがきっかけとなり、以前から考えていた就農を決意した。兵庫県楽農センターで土地の管理や栽培の方法について学んだのちに就農した。E氏は農家になることについて、働くうえでの意識は前職との違いはなく、生産物の管理やマーケティングなどを個人で行う経営者として働いている感覚であるという。就農するにあたっての問題点として、親から農地を相続した時点で名義上は農家という扱いになっていたため、実際に農家としての活動を始めた際に就農に伴う費用面の支援が受けられなかったことが挙げていた。また、就農1年目はほぼ無収入に等しい点や、今まで働いてきた職でのキャリアを失うといった点からも、転職して農家になる人は少ないと感じていた。

③30代男性F氏

30代男性F氏は、西谷地区で主にトマトやきゅうり、なすびなどの夏野菜や、太ねぎ、白菜等の野菜を生産している専業農家である。F氏はJAを通じて大手総合スーパーマーケットへ出荷している。また、個人として阪神地方に展開する食料品スーパーマーケットXと契約し出荷している。この契約は大規模農家でなければ難しいが、10年前の地場産野菜のブームの際に交わした契約を継続している。F氏は、出荷する農産物の包装に名前を記載して長年販売を続けてきた経験から、名前を覚えてもらい購入につなげるファンづくりが重要であると指摘した。

F氏は、宝塚市南部の出身であるが、より農村に近い環境で実践的に農業をしたいという考えから縁のあった西谷地区で農地を購入し、就農したという。

F氏はJAの太ねぎの部会と給食の部会に所属している。太ねぎの部会はブランド野菜であるたからづか西谷ふとねぎを計画的に栽培しており、冬季に収入を得る目的で若手の農家を中心に結成された。給食の部会は、第3章3において述べた宝塚市内の小中学校で提供されている給食に供給するための10名程度の農家の組合であり、市内の給食で西谷産野菜を使用する機会を増やしたいという市の要望を受けて8年ほど前に結成されたという。

F氏は、高齢になった農家から農地の管理を任されている。西谷地区の農地は小規模なものが多いことから、次世代に農業を引き継ぐためにそれらを集約し、現在より大規模に農業が行える環境を整備すべきであると考えている。

④20代男性G氏

G氏は、宝塚市南部の農家で、有機栽培のほうれんそうや玉ねぎ、トマトをはじめとする夏野菜や、減農薬の米を西谷地区でも生産する専業農家である。

G氏は、南部の中では比較的広い農地を所有しているが、西谷地区の農家ほど広い農地は所有していない。そこで、経営規模拡大を図るため、2年前より一定数の広い農地を確保できる西谷地区において、高齢化で管理が難しくなった農地を借りて米を生産しており、減農薬であることを活かした独自のブランドで販売している。

販売先として、G氏は個人経営の小売店や、伊丹市においてJAが運営する直売所である「スマイル阪神」への出荷、個人への直接販売を挙げていた。なお、都市農家は、流行に伴って様々な作物を生産する臨機応変さと情報収集が重要であるため、スマイル阪神での農産物の売れ行きを重要な判断材料としているとのことであった。

G氏は代々の農家であり、親も典型的な都市の専業農家であったが農家を継ぐつもりはなく、大学卒業後は一般企業に勤務していたものの、後継者問題について考える機会があり、就農することを決意した。

G 氏は一社員として企業で働いていた時とは違い、農業は自分で一日の作業を決めることから、意識が自営業の経営者に変わったという。

(3) 宝塚市での朝市を運営する農家

①70 代男性Ｈ氏

70 代男性Ｈ氏は、米を主体として、大根やほうれんそう、黒大豆などの季節に応じた野菜類を栽培する専業農家である。ほかにも、米粉を利用したパンなどの加工品の販売を行っている。原料となる米粉は、米の加工品の生産が推奨される以前より市外の業者に依頼して加工しているとのことだった。こうした米を利用した加工品の出品が可能であったことも朝市に参加するきっかけになったという。それらの商品の販売先としては、朝市と西谷夢市場への出品が挙げられていた。

Ｈ氏は家業を引き継ぐ形で就農したが、専業農家であった両親とは異なり、兼業農家として就農したのち定年後に専業農家になった。

宝塚市南部で行われている朝市の活動に関しては、西谷産の野菜を交通の便が良い場所で販売できるという点や、交流することで客に顔と名前を憶えてもらってファンを作るという点でも必要な活動であり、今後も継続していきたいと考えている。

②60 代男性Ｉ氏

60 代男性Ｉ氏は、主に野菜を生産する西谷地区の専業農家である。以前は兼業農家として農業を営んでいたものの、定年後の現在では趣味的に農業を行っている。生産している野菜については特に決めておらず、農地のローテーションに合う野菜を多く栽培している。筆者が聞き取り調査を行った際にはかぼちゃを販売していたが、今後の計画ではキウイフルーツやブドウ、イチジクなどの果実類の生産に徐々に切り替えていく予定とのことであった。近年の西谷地区の農業については、第３章４ (3) で述べたスーパーマーケットでの取引が開始されたことや、西谷夢市場が設置されたことで軟弱野菜をすぐ出荷できるようになり、西谷地区の知名度が上昇したものの、薄利多売の傾向になっていると感じていた。

Ｉ氏は朝市の販売で客と交流して流行を聞くことがやりがいであり、それを参考にして生産する野菜を決めることもあるという。筆者が聞き取り調査をしている時にも、親子連れの顧客と交流する様子が見られた。

農業を行ううえでの課題として、近年シカやイノシシなどの有害鳥獣による被害が深刻である点を挙げた。だが、有害鳥獣対策の補助金に関しては、山際の農地を所有する複数人からの要請がなければ支給されず、対策にかかる費用を個人で支払わなければならないことを問題視していた。

③40 代男性Ｊ氏

40 代男性Ｊ氏は、野菜を主軸に米も生産する専業農家である。Ｊ氏は自身が行っている農業について典型的な近郊農業であると述べていた。生産物としては、トマト、なすび、きゅうりなどの夏野菜や、大根、ふとネギなどの冬野菜を季節に応じて栽培しており、一つの作物が病気や天候などの要因で収穫できなくなっても損害が軽微になるようにしているという。また、大根などの一部の作物は、季節による温度の変化に対応するため異なる品種を生産している。出荷先としては JA を通じての販売がほとんどであり、販売先には阪神地方に展開する食料品スーパーマーケットＹも含まれているとのことだった。

Ｊ氏は大学卒業後、専業農家である親の農地を引き継いで就農したという。なお、農家という職業については、毎年異なる環境（病気や天候）に対応するための情報収集に加えて、経理なども考慮しなければならない自営業の社長のような存在であると考えている。

西谷地区の農業振興策については、地域の特性により合った振興策を講じる必要があると指摘していた。

第４章　おわりに

本研究では、住宅都市である宝塚市において、継続的に農業が営まれる北部の西谷地区を中心に、都市における農家の実態と戦略を明らかにしたうえで、今後も同地域において農業が継続するための方法について検討することを目的とした。

第２章では、宝塚市において農業振興のために地産地消が重要視されていることを示したうえで、大

阪平野に位置する二つの都市での地産地消に対する都市住民の関心が分かる事例を取り上げることによって、都市近郊農業地域における地産地消の持つ意味について考えた。都市近郊農業地域では、地産地消を打ち出して住民が農業振興の役割を担うことが例が示された。

第3章では、宝塚市の概要と農業の現況について説明したうえで、市やJAの担当者、兼業農家3名、専業農家4名、朝市に参加している農家3名に聞き取り調査を行った結果を基に、西谷地区の農業と振興のための取り組み、対象とした農家の意識について明らかにした。

宝塚市の農業の中心は北部の西谷地区であり、都市近郊農業が営まれている。農業振興に向けた様々な取り組みが講じられており、市が主体となっている近年の取り組みとしては、給食や農業振興施設である西谷夢市場の設置等が挙げられ、市役所を中心にJAなどの様々な主体が農業振興に取り組んでいるが、市民の西谷地区の農業への認知度は低い。

2022年に策定された第2次宝塚市農業振興計画で示されていたとおり、西谷地区では農家の高齢化と減少、後継者不足が農業に影響を与えつつあった。管理することが困難となった土地は、一部の農家が買い取ったり、代わりに管理することで、維持されている例も見られた。対策として、自治体も農家も、農地を集約し次世代の農業者が営農しやすい環境を作り、集落単位で助け合って計画的に農業を行なう集落営農を実施することが必要と考えていた。

しかし、集落営農の組織づくりに関しては、JA兵庫六甲西谷支店が積極的に働きかけているものの、難航しているとみられる。また、獣害対策の補助金が支給される条件を満たせず、自費で対策を行っている農家もあり、獣害が少数の農家によって対策されていることが推測される。

以上のように、西谷地区での農業の持続は容易ではない。しかし、厳しい環境においても、農業を通じてやりがいを見出している農家や、様々な農産物に取り組み独自の販売ルートを開拓することによって戦略的に農業経営を行うことで利益を出している農家が存在する。

一方、西谷夢市場に出荷したり、朝市の運営を行う農家は小規模な農家が多い。農家一人一人の売上額は少ないものの、先祖から受け継いできた農地を維持しつつ農業を継続し、それらの農家の多くは自らが生産した野菜が購入されることをやりがいとしている。兼業農家が多い西谷地区では、彼らのような兼業農家が主体となって西谷地区の農地が維持されていることが考えられる。

専業農家においては、特に若手を中心に精力的な農業経営が実施されていた。それら専業農家の多くに共通する点として、顧客を作り出していることが挙げられる。D氏は旬の食材を口伝でのつながりで販売、E氏は事業者を対象としていちごを販売し、F氏は包装に自分の名前が記載された野菜をスーパーマーケットで販売することでファンづくりを行っていた。また、大規模な農地を所有し、米を主体としながらも様々な野菜を生産することで利益を上げているD氏に対して、販売単価が高く競争相手が少ないいちごを狭い農地で生産することで利益を上げているE氏、ブランド化した太ねぎを生産するF氏、季節に応じた野菜を生産し朝市にも出品するJ氏など、特色のある戦略的な農業経営が行われていた。

また、都市化が進む宝塚市南部の農家で西谷地区において農業生産規模を拡大したG氏は、顧客を作り出している点は西谷地区の農家と同じであるが、特に個人の顧客を対象にして環境配慮型農業を打ち出した農産物を販売している点は異なっていた。

彼ら専業農家の中には、前述したような状況にある農地を購入したり、代わりに管理することで規模拡大につなげている農家が存在した。

そして、宝塚朝市に参加している農家は、西谷夢市場の開設や、スーパーによる販売が開始される以前より、南部地域で西谷産野菜の販売を行ってきた。彼らは活動を通じて西谷産野菜のファンを作ることによって、市内での西谷産野菜の購買促進に貢献していた。また、朝市で消費者と交流することを楽しんでいた。しかし、朝市に参加する農家数が減りつつあることが課題として挙げられていた。

こうした活動的な農家がいる一方で、現在西谷地区では、高齢化に伴って様々な問題が発生していた。対策となる農地集約や集落営農の取り組みは、次世代の農家が農業を円滑に経営できるという点や、高齢化が進む中で農業を継続させるために必要であるといえる。しかし、現状では管理が出来なくなった農地が点在し、対応できる残った農家が引き受けている状態であり、こうしたケースが増加しているとみられる。ある農家は、もっと農地を所有している責任を自覚して維持する努力をすべきであり、管理を行っている残った農家への支援が必要であることについても指摘していた。また、獣害対策のための支援が行き渡たらず、残った農家の負担が増加していた。

全国的な傾向と同じく農家数が減少傾向にある西谷地区において、今後より一層残った農家への負担が増加することが懸念される。やる気のある残った農家の意欲を削がないためにも、こうした農家個人への支援を含む対策の推進は必要であると考える。

農業従事者ではない大部分の市民については、宝塚市の農業に対する関心が高いとはいえなかった。しかし、宝塚市において農業が営まれることによって果たされる多様な機能による恩恵を受けている以上、宝塚市において農業を継続する意義を理解し、農業の中心である西谷地区への関心を深めるべきであると考える。

廉林・松村（2010）が研究した時点での大阪府茨木市では、市民の地場産野菜に対しての関心はあったものの、野菜の取り扱い店舗に対する知識は不足していた。宝塚市においても同様であるといえ、関心を高める取り組みが既に一定程度実施されているが、より一層関心を高めるには、市の広報などに宝塚市の農業に関する情報を継続的に掲載するといった取り組みも有効だと思われる。西谷地区で行われている農業には、米や太ねぎ、栗といったブランド化された農産物や、やる気のある個性的な農家といったPRに向けての魅力となる要素が存在している。市民に対してこうした魅力をより積極的にPRすることによって、宝塚市においても「八尾バル」のような関心をもった市民による自主的な地産地消推進の取り組みへとつながる可能性もあり、そうした場づくりも必要であろう。

そのためには、市民の多くがアクセスしやすい朝市の運営が継続されるためのより一層の支援が求められる。また、全国的にも知られている宝塚歌劇場と宝塚駅を結ぶ商業施設において、西谷産農産物を使用する店舗が増加するように推進していくことにより、結果的に西谷産農産物に対する市民の認知度もより一層高まるのではないだろうか。

宝塚市においての西谷産農産物のブランド力がさらに高まれば市民にとっての誇りになり得る。その結果、西谷産農産物の市内での購入が増えれば、西谷地区の農業が継続につながることが期待される。

謝辞

本研究においては、西谷地区で農業を営んでいる農家の皆様、宝塚市農政課職員の皆様、JA兵庫六甲西谷支店営農担当職員の皆様にご協力いただきました。心より御礼申し上げます。

注

1) 八尾バル公式SNSによれば、2020年に延期開催された第17回ファイナルまで開催されていた。

文献

石原肇（2019）『都市農業は皆で支える時代へ－東京・大阪の農業振興と都市農地新法への期待－』古今書院

廉林篤・松村暢彦（2011）「都市近郊農業に関する都市住民の態度構造と情報提供による態度行動変容分析」都市計画論文集45-3，pp.805-810

宝塚市編集発行（2012）『－市民とともに「守り・育む宝塚の農」―宝塚市農業振興計画―』

宝塚市企画経営部政策室政策推進課（2021）『第6次宝塚市総合計画』宝塚市

宝塚市産業文化部産業振興室農政課編集発行（2022）『第２次宝塚市農業振興計画』

宝塚市都市整備部都市整備室都市計画課編（2019）『たからづか北部地域土地利用計画』宝塚市
中窪啓介（2019a）「野菜の供給体制」山口覚・水田憲志・金子直樹・吉田雄介・中窪啓介・矢嶋巌『図説京阪神の地理―地図から学ぶ―』ミネルヴァ書房，pp. 132-133
中窪啓介（2019b）「都市農業への注目」山口覚・水田憲志・金子直樹・吉田雄介・中窪啓介・矢嶋巌『図説京阪神の地理―地図から学ぶ―』ミネルヴァ書房，pp. 134-137
田林明（2006）「日本の農業の特徴」山本正三・谷内達・菅野峰明・田林明・奥野隆史『日本の地誌 2 日本総論Ⅱ（人文・社会編）』朝倉書店，pp. 166-169
矢嶋巌（2011）「衛星都市の水道事業における水源確保―兵庫県宝塚市を事例に―」 経済地理学年報 57-1，pp. 56-74
宝塚市農政課作成パンフレット『「西谷野菜」が、ご近所に。』
たからづか牛乳公式サイト http://www.takagyu.jp/（2022 年 12 月 13 日閲覧）
宝塚市公式サイト「イベント　宝塚朝市」https://www.city.takarazuka.hyogo.jp/kanko/1009480/1043599/1015980.html（2022 年 10 月 7 日閲覧）
宝塚市公式サイト「学校給食の献立」https://www.city.takarazuka.hyogo.jp/kyoikuiinkai/gakkorecipe/1020803/index.html（2022 年 6 月 29 日閲覧）
宝塚市公式サイト「宝塚市のあらまし」https://www.city.takarazuka.hyogo.jp/about/profile/1001192.html（2022 年 6 月 29 日閲覧）

（ないとう　あまね・神戸学院大学人文学部学生）
（やじま　いわお・神戸学院大学人文学部）